

外国人留学生の文語文法・古語学習について考える(5) — 係助詞・副助詞の場合 附・古文への適用 —

深 澤 愛

1. はじめに

本稿では、深澤愛（2015）に引き続き、外国人留学生の文語助詞の学習について考える。

学習内容を提案するに際しての基本方針は、深澤（2013）（2014a）（2014b）（2015）で掲げてきたものと同様である。改めて掲げておく。

1. 古文の精読ではなく、大略をつかめるようにすることを目標とする。
2. 学習者の負担をできるだけ少なくする。

また、国立国語研究所「日本語歴史コーパス」¹を用いて、使用頻度の高い語を抽出した上で学習項目を選定する点も、これまでと同様である。なお、本稿を執筆している2015年10月時点では「平安時代編」と「室町時代編Ⅰ狂言」が公開されているが、「室町時代編」公開以前に執筆した稿との整合性を保つために、本稿では「平安時代編」のみを用いる。以下、「日本語歴史コーパス 平安時代編」を「コーパス」と称する。

さて、コーパスで助詞に分類されている語²は219058例ある。内訳³は表1のとおりである。深澤（2015）では格助詞と接続助詞について学習内容の提案を行った。本稿では、これらに続いて使用数の多い係助詞と副助詞について、学習項目の選定及び訳法の提示を行いたい。2節で係助詞について、3節で副助詞について述べる。

表1

格助詞	104415
係助詞	50863
接続助詞	48286
副助詞	11988
終助詞	3365
準体助詞	141
計	219058

4節では、深澤（2013）（2014a）（2014b）（2015）及び本稿で示した学習項目の古文への適用についてささやかな検証を行い、一連の稿の締めくくりとしたい。

2. 格助詞

2.1 検討すべき助詞

学校文法で係助詞とされるのは、「も・は・ぞ・なむ・こそ・や・か」の7語である。コーパスで係助詞と分類されるものも、語形の種類としては同様の7語である⁴。それぞれの使用数をまとめると表2のようになる。

表2

も	18714
は	16321
や	3908
ぞ	3634
こそ	3185
なむ	2928
か	2173
計	50863

「も」と「は」は現代語と用法が大きく変わっていない⁵ので、学習項目に取り上げる必要はない。検討が必要なのは、それ以外の5語である。「ぞ・なむ・や」は現代語にない語形か、現代語に同じ語形があるとしても用法が大きく異なるからである。「こそ・か」は、現代語でも近い用法で用いられはするが、学習項目として取り上げるべきか否かについては一考の必要がある。学校教育における文語文法学習で「係り結び（の法則）」が大きく取り上げられる場合、「ぞ・なむ・や・か・こそ」があたかも1セットの助詞群のように扱われるからである。

2.2 「や」「か」についての検討

まず、疑問文を作る「や」「か」について検討しよう。小田勝（2015）は、古代語の真偽疑問文（述べられた命題が成立するかどうかわからないという意味を表す文）の基本形式を次の3つに定める（p.245。例文は省略する）。

- ①助詞「や」を文中に用いる（…や…連体形。）
- ②助詞「や」を文末に用いる（…終止形+や。）
- ③助詞「か」を文末に用いる（…連体形／名詞句+か。）

文中に「か」が用いられるのは、主には次のような補充疑問文（述べられた命題の中にわからない部分があるという意味を表す文）の場合である⁶。小田（2015）に示されている例を挙げる。

「いづれの山か天に近き」と問はせ給ふに（竹取）（p.248）

上記③は現代語と同じ用法と言えるので、学習項目から外したとしても問題ない。学習項目に「か」を入れるか否か考えるときに問題となるのは、補充疑問文の場合である。

補充疑問文の場合は「いづれ」など疑問詞が用いられるため、疑問詞の意味が分かっていたら、おのずと現代語の疑問文は導き出せるように思われる。ただし、連体形になっている文末語を現代語に置き換えやすくするような情報は必要になるかもしれない。また、「係り結び（の法則）」の提示にこだわるならば、文末が連体形になることに注意を向けたくもあろう。

いづれにしても、助詞「か」を含む補充疑問文を学習者がどの程度過たずに理解できるかについて調査してからでないと決定しがたいのが事実である。本稿では、学習項目をできる限り少なくする方針を優先し、ひとまずは「か」を学習項目から外しておく。

上記①②に沿って、「や」の訳法を次のように提案する。

(1) ～や…。 → ～…か。〈疑問文〉

(例) つらくや思はむ。 → つらく思うだろうか。

※文の途中に「や」がある場合、文末が「連体形」になっている。

(2) ～や。 → ～か。〈疑問文〉

(例) 御子はおはすや。 → お子さんはいらっしゃるか。

2.3 「ぞ」「なむ」「こそ」についての検討

次に「ぞ・なむ・こそ」について検討したい。

「こそ」の場合、仮にそのまま現代語訳に入れ込んだとしても文の大意の把握には悪影響はないと思われる。(3)(4)を参照されたい。

(3) 男はこの女をこそ得めと思ふ。

→ 男はこの女をこそ手に入れようと思う。(伊勢物語)

(4) 夏こそをかしけれ。 → 夏こそおもしろい⁷。(枕草子)

このことに鑑みて、本稿では「こそ」を学習項目から外すことにする。ただし、文末が已然形となるという情報がないと学習者の文意把握に支障が生じるようであれば、改めて学習項目として立てることとしたい。

「ぞ」「なむ」は、現代語訳にそのまま入れ込むことはできないので、学習項目として立てる必要がある。その際、「なむ」に関しては確認しておくべきことがある。次の二つの「なむ」についてである。山口秋穂・秋本守英編(2001)の「な

む」項の記述（山口秋穂執筆）をもとにまとめる。引用例は、山口・秋本編（2001）による。

(5) 詠えの終助詞。未然形に接続。

ま遠くの野にも逢はなむ（奈牟）心なく里のみ中に逢へる背なかも

（万葉集 3482）

(6) 完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」+推量の助動詞「む」。活用語の連用形に接続。

伊豆の海に立つ白波のありつつも継ぎなむ（奈牟）ものを乱れしめめや

（万葉集 3376）

係助詞「なむ」とこれらとの識別方法を示すことは、学習者に負担をかけないという本稿の基本方針には反する。しかし、仮に(5)(6)のパターンが係助詞と同等程度の使用頻度だった場合は、何らかの形で学習項目に加える必要が出てくるだろう。いずれにせよ、係助詞「なむ」、(5)、(6)、それぞれの使用数の確認が必要である。

(5)について、コーパスで終助詞「なむ」を検索すると、114例を数える。また、(6)のパターンについて用例⁸を抽出すると、480例あることが分かる。係助詞「なむ」の例は2928例であるので、学習者が文中に「なむ」を見つけたときにそれが係助詞である確率は8割程度になることが推測される。(6)となる可能性がさほど低くない以上、現代語に置き換えて理解するのに難しさを感じる場合も容易に想定されはする。ただ、最優先の学習項目は圧倒的に係助詞であることも事実である。よって、本稿では「なむ」の訳法としては係助詞の場合のみを取り上げたい。

では、「ぞ」「なむ」の訳法はどうすべきだろうか。山口・秋本編（2001）は「ぞ」について、「結局、全体としての係りの「ぞ」は、文末と呼応して強い述体陳述を行いつつ、当該箇所を指定・強調する役割を果たしているのである」と説明する（「ぞ」「意味・用法」項。野村剛史執筆）。この場合の「指定・強調」とは、文の焦点を示すことなどであり、安易に現代語に置き換えられるものではない。また、小田（2015）は、「ぞ」「なむ」「こそ」を用いる係り結びについて、「その頻度からみて、古代語の構文上、かなり本質的な役割を担っていたであろうと思われるが、その役割については今のところ不明である」とし、これらの表現価値について

は慎重に明言を避けている (p.447)。本稿で示す訳法には、強調の意味があるとされること、ただし現代語訳しなくてよいこと、の2点を示しておきたい。

以上に従って、(7)に「ぞ」「なむ」の訳法を示す。

(7) ～ぞ／なむ…。 → ～…。

(例) 雪ぞ降りける。 → 雪が降った。

海の中よりぞ出で来る。 → 海の中から出て来る。

もと光る竹なむ一筋ありける。 → 根元の光る竹が一本あった。

かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。

→ あの白く咲いた(花)を、夕顔と申します。

※「ぞ」「なむ」には強調の意味があるとされるが、現代語訳しなくてよい。

※文の途中に「ぞ」「なむ」がある場合、文末が「連体形」になっている。

なお、係り結びに関わる助詞全てを取り上げない以上、当然のことながら係り結び自体の説明も学習項目から外すことになる。

3. 副助詞

3.1 学習項目の選定

コーパスで副助詞に分類されている語は11988例ある。その内訳は表3の通りである⁹。特に用例数の少ないもの、現代語と同じ語形で用法もほぼ同じものを除くと「だに」「しも」「し」が学習項目の候補として挙がるだろう。これらのうち、現代語に同じ語形がなく、用例数もある程度ある「だに」「しも」については学習項目としたい。

「し」についてはどうか。コーパスで抽出される助詞「し」の用例数は、表3にも示したとおり242例である。一方、助動詞「き」の連体形「し」の用例数¹⁰は、3926例である。学習者が古文で接する「し」は、助詞であるよりも助動詞である可能性の方が格段に高い¹¹。副助詞「し」を学習項目として取り立てると、助動詞「き」の連体形

表3

など	6018
ばかり	1502
のみ	1163
だに	941
まで	851
しも	702
さえ	518
し	242
ずつ	45
がに	4
すら	2
計	11988

「し」を誤解する（強調の意味にとってしまう）率が高まる懸念がある。よって、本稿では「し」を学習項目に含めない。

「だに」「しも」に加えて、本稿では「ばかり」も学習項目に加えたい。

「ばかり」は現代語でも用いるので学習項目にしなくてもよいように、一見思われる。しかし、例えばグループ・ジャマシイ（1998）の「ばかり」の項目を見ると、現代語「ばかり」の文型が非常に多様で、「ほど」「だけ」「のみ」など類似する他の助詞との使い分けも多岐に亘ることが窺える。語形が同じゆえに古文の「ばかり」をそのまま現代語訳に用いても、その現代語訳の「ばかり」の意味を理解するのに手間取るのだとしたら、学習負担の軽減にはつながらない。

また、山口・秋本編（2001）によれば、古語の「ばかり」は、「鎌倉時代以降は程度の「ほど」更に明治以降は限定の「だけ」の盛行もあって」、次第に「専ら」の意味、あるいは「ばかりに」の形で接続的に用いられることが多くなった」という。この指摘を踏まえるなら、古語の「ばかり」は現代語の「ほど」や「だけ」で置き換えることでむしろ理解しやすくなるのではないか。

以上のことから、「ばかり」については学習項目として取り上げ、他の語に置き換えて理解することを提案したい。

3.2 「ばかり」「だに」「しも」の訳法

小田（2015）によると、「ばかり」には限定、程度、概数量を表す用法があるという（p.408）。いずれの用法も現代語に残るものであるが、3.1に述べた理由によって、別語を用いた訳法を提示したい。

(8) ～ばかり… → ～ほど／だけ…

(例) 蛍ばかりの光だになし。 → 蛍ほどの光さえない。

月影ばかりぞ、八重葎にもさはらず、さし入りたる。

→月の光だけが、生い茂る雑草にもさえぎられず、さしこんでいる。

「だに」は、「本来、最低限の対象を譲歩的に表し、その大部分は願望の意味合いを含む」ものである（山口・秋本編（2001）「だに」項。野村剛史執筆）¹²。この用法の現代語訳としてしばしば用いられるのが「せめて…だけでも」である。一方、中古以降の「だに」は、「すら」の本来の意味である、「なさそうな事態が、予

期に反して、ある、という意」(小田(2015) p.412)をも抱え込んでいく。この用法の現代語訳としてしばしば用いられるのが「さえ」である。なお、山口・秋本編(2001)には「だに」が「平安中期以降、次第に単なる極限的な対象を示すにすぎなくなった」とある。

本来的な意味の順に訳法を示すのであれば、「せめて…だけでも」の方が先だが、本稿では「さえ」の方を優先的に示したい。学習者が触れる古文が何によるかにも左右されようが、「さえ」の方に接する機会の方が多いように感じられるからである¹³。

(9) ～だに… → ～さえ… / せめて～だけでも…

(例) 螢ばかりの光だになし。 → 螢ほどの光さえない。

[かぐや姫が月に帰る場面で] のぼらむをだに見送りましたまへ

→ せめて(私が月に) のぼるのだけでもお見送りください

「しも」は強調の働きがあるとされるが、訳法を示す場合は肯定文と否定文とを分けておいた方が混乱が少ないだろう。「しも」にあてはまる現代語がそれぞれ異なるからである。

(10) ～しも…。〈肯定文〉 → ～ちょうど/まさに…。

(例) 昨日の子しも走る。 → 昨日の子がちょうど走ってくる。

(11) ～しも…。〈否定文〉 → ～全く/決して…。

(例) 京に思ふ人なきにしもあらず。

→ 京に思う人が全くいないのではない。

4. 古文への適用

4.1 本文の選定

本節では、深澤(2013)(2014a, b)(2015)及び本稿2節3節で示した訳法が、古文にどの程度適用できるか検証したい。古文のどの程度の語に訳法を適用でき、どんな語への対応が課題として残るのかを明確にしておくためである。もちろん、訳法を用いて導き出せる現代語が、学習者の文意把握にどの程度貢献できるものなのかは、別に検証が必要であることは言うまでもない。

検証に用いる古文は、高校教科書に多く採用されているものにした。大学で外国

人留学生とともに古典文学等を学ぶ日本人学生が、大学入学以前に触れている可能性の高いものを選ぶことになる。つまり、外国人留学生にとっては、大学の授業についていくためにも基礎知識として触れておいてもよいようなものである。

本文選定は次の手順で行った。まず、主な高校教科書（国語科で扱う教科書）のうち、「古文」と銘打ってある次の10種の教科書に収録されている文学作品を照らし合わせた。

- (a)『古典1 改訂版』（大修館書店、2011年） (b)『古典2 改訂版』（大修館書店、2011年） (c)『高等学校 改訂版 古典 古文編』（第一学習社、2011年）
 (d)『古典』（筑摩書房、2011年） (e)『古典 古文編』（東京書籍、2011年）
 (f)『古典 古文編』（数研出版、2011年） (g)『古典 古文編』（教育出版、2011年）
 (h)『高等学校 古典〔古文編〕改訂版』（三省堂、2011年） (i)『高等学校 古典（古文編）改訂版』（ピアソン桐原、2011年） (j)『高校生の古典』（明治書院、2011年）

次に、上記のうち6種以上の教科書で採用されているものを、検証に用いる古文に選んだ。以下の通りである。参考として、掲載していた教科書を記号で示しておく。

『伊勢物語』 初冠	… (c) (d) (f) (g) (i) (j)
『古今和歌集』 仮名序	… (d) (e) (f) (g) (h) (i) (j)
『源氏物語』 光源氏の誕生	… (c) (d) (e) (f) (g) (h) (i) (j)
『枕草子』 二月つごもりごろに	… (c) (e) (f) (g) (h) (i)
『大鏡』 花山院の出家	… (c) (d) (e) (f) (h) (i)
『方丈記』 行く河の流れ	… (c) (d) (f) (g) (h) (i) (j)

『大鏡』『方丈記』はコーパスの対象となっている時代に成立したものではない。ただ、「平安時代編」と銘打ったコーパスの情報を基に提案した訳法が、時代の異なる文にどの程度適用できるかを見るためにも、検証結果を挙げておく。

検証する際の本文は、コーパスの底本である『新編日本古典文学全集』とした。なお、以下に挙げる文は、紙幅の都合もあるため教科書に掲載されるものの一部であることもある。

4.2 適用例

提案した訳法（助動詞に関しては、語形変化表）が該当する箇所には下線を引き、その隣に該当する訳法（または語形変化表）の番号を示した。番号の示し方は次の通りである。

- ①：深澤（2013）。助動詞に対応。②で対応できないものについてのみ①を示す。対応する語形変化表の番号を表1～6で示す。
- ②：深澤（2014a）。動詞に対応。ただし、訳法は助動詞や助詞等も含む。訳法の番号を（ ）付き数字（深澤（2014a）で掲げたものと同じ番号）で示す。
- ③：深澤（2014b）。形容詞に対応。訳法の番号を（ ）付き数字（深澤（2014b）で掲げたものと同じ番号）で示す。
- ④：深澤（2015）。接続助詞に対応¹⁴。深澤（2014a、b）のいくつかの訳法の修正案も掲載¹⁵。訳法の番号を（ ）付き数字（深澤（2015）で掲げたものと同じ番号）で示す。
- ⑤：本稿2節・3節。係助詞、副助詞に対応。訳法の番号を（ ）付き数字（本稿で掲げたものと同じ番号）で示す。

基本的には、訳法で示す範囲（例えば、「iて→〈て形〉」という訳法なら、動詞＋接続助詞「て」）に下線を引く。ただし、訳法の該当する箇所が連続する場合は訳法で示す範囲よりも短い範囲に下線を引くことになる。

また、訳法に表示される活用語は終止形が多い。しかし、助動詞と動詞については語形変化表を踏まえて訳法を適用することを想定している。そのため、助動詞と動詞については訳法に出ていない活用形であっても適用させている（下線を引いている）箇所がある。

なお、対応する現代語を知らなければ文意の把握は難しいと思われる語句については、太字で示した。

以下、適用例を挙げる。

『伊勢物語』初冠

むかし、男、初冠して^{②16}、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり^{②17}。
その里に、いとなまめいたる^{②17}女はらからすみけり^{②17}。この男かいまみてけり^{①表6}。

思ほえず⁽²⁾¹⁹、ふる里にいとほしたなくて⁽³⁾⁸ありけれ⁽²⁾¹⁷ば^{(1)表6}、心地^{こち}まどひにけり^{(1)表6}〇

男の、着たり⁽²⁾¹⁷ける^{(1)表6}狩衣^{かりぎぬ}の裾^{すそ}をきりて⁽²⁾¹⁶、歌を書きて⁽²⁾¹⁶やる。その男、信夫^{しのぶ}摺^{ずり}の狩衣をなむ⁽⁵⁾⁷着たり⁽²⁾¹⁷ける^{(1)表6}〇

春^{かすがの}日野の若むらさきのすりごろもしのぶの乱れかぎりしられず⁽²⁾¹⁹

となむ⁽⁵⁾⁷おひつきて⁽²⁾¹⁶いひやりける⁽²⁾¹⁷〇 ついでおもしろきこと⁽³⁾¹⁰ともや⁽⁵⁾¹思ひけむ。

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れそめにし^{(1)表6}われなら^{(1)表2}なくに

といふ歌の心ばへなり^{(1)表2}〇 昔人^{むかしびと}は、かくいちはやきみやび⁽³⁾¹⁰をなむ⁽⁵⁾⁷しける⁽²⁾¹⁷〇

『古今和歌集』 仮名序

やまとうたは、人の心を種^{たね}として⁽²⁾¹⁶、万^{よろづ}の言^{こと}の葉^はとぞ⁽⁵⁾⁷なれり⁽²⁾³⁰ける^{(1)表6}〇 世の中にある人⁽²⁾²⁴、ことわざ^{しげ}繁^{しげ}きもの⁽³⁾¹⁰なれば^{(1)表2}、心に思ふこと⁽²⁾²⁴を、見るもの⁽²⁾²⁴聞くもの⁽²⁾²⁴につけて⁽²⁾¹⁶、言ひ出せる⁽²⁾³⁰なり^{(1)表2}〇 花^{うぐひす}に鳴く鶯⁽²⁾²⁴、水^{かはづ}に住む蛙⁽²⁾²⁴の声^{こゑ}を聞けば⁽⁴⁾¹、生きとし生ける⁽²⁾³⁰もの、いづれか歌をよまざり⁽²⁾¹⁹ける^{(1)表6}〇 力をも入れず⁽²⁾¹⁹して天地を動かし、目に見えぬ⁽²⁾¹⁹鬼神^{おにがみ}をもあはれと思はせ、男女の中^やをも和らげ、^{たけ}猛^{たけ}き^{ものふ}武士⁽³⁾¹⁰の心をも慰むるは歌なり^{(1)表2}〇

『源氏物語』 光源氏の誕生

前^{さき}の世にも御契^{ちぎ}りや⁽⁵⁾¹深かりけん、世になく⁽³⁾⁸きよらなる^{(1)表2}玉^{をのこみ}の男御子^こさへ生まれたまひぬ⁽²⁾¹⁸〇 いつしかと心もとながらせたまひて⁽²⁾¹⁶、急ぎ参らせて⁽²⁾¹⁶御覧ずるに⁽⁴⁾⁷、めづらかなる^{(1)表2}児^{ちご}の御容貌^{かたち}なり^{(1)表2}〇 一の皇子^みは、右大臣^みの女御^{にようこ}の御腹^{はら}にて、寄せ重く、⁽³⁾⁸疑ひなきまうけの君⁽³⁾¹⁰と、世にもてかしづききこゆれど⁽²⁾²⁹、この御にほひには並びたまふ⁽²⁾¹⁸べくもあら^{(1)表5}ざり^{(1)表3}ければ^{(1)表6}、おほかたのやむごとなき御思ひ⁽³⁾¹⁰にて、この君をば、私物^{わたくしもの}に思ほし^{(1)表6}かしづきたまふ⁽²⁾¹⁸こと限りなし。〇⁽³⁾⁷

『枕草子』 二月つごもりごろに

二月つごもりごろに、風⁽³⁾⁸いたう⁽³⁾⁸吹きて⁽²⁾¹⁶、空⁽³⁾⁸いみじう⁽³⁾⁸黒きに⁽⁴⁾⁸、雪すこしうち散りたる⁽²⁾¹⁷ほど、黒戸^{くろど}に主殿司^{とのもづかさ}来て⁽²⁾¹⁶、「かうて候^{さぶら}ふ」と言へば⁽⁴⁾¹、寄りたる⁽²⁾¹⁷に、「これ、公任^{きんたふ}の宰相^{さいしやう}殿^{どの}の」とてあるを見れば⁽⁴⁾¹、懐紙^{ふところがみ}に、

すこし春ある心地こそすれ

とあるは、げに今日のけしきに、いとよう^{③(8)}あひたる^{②(17)}、これが本^{もと}はいかであつ
くべからむ^{①表4}と思ひわづらひぬ^{①表6}。「誰々か」と問へば^{④(1)}、「それぞれ」と言
ふ。^{②(25)}みないとづかしき中^{③(10)}に、宰相の御いらへを、いかでか事なしびに言ひ
出^いでむ^{②(20)}と、心一つに苦しきを、御前^{おまへ}に御覧ぜさせむ^{①表4}とすれど、上^{うへ}のおはし
まして^{②(16)}、御とのごもりたり^{②(17)}。主殿司は、「とく^{③(8)}とく^{③(8)}」と言ふ。^{②(25)}

『大鏡』花山院の出家

あはれなる^{①表2}ことは、おりおはしましける^{②(17)}夜は、藤壺^{ふぢつぼ}の上^{うへ}の御局^{つぼね}の小戸^{こと}より出
でさせたまひける^{②(17)}に、有明^{ありあけ}の月のいみじく^{③(8)}明^あかかり^{③(9)}ければ^{①表6}、「顕証^{けんしよう}にこ
そありけれ^{②(17)}。いかがすべからむ^{①表4}」と仰せられける^{①表6}を、「さりとて、とま
らせたまふべき^{②(26)}やうはべらず^{②(19)}。神靈^{しんし}・宝剣^{ほうけん}わたりたまひぬ^{②(18)}ぬる^{①表6}には」と、
粟田殿^{あはたどの}のさわがし申したまひ^{②(18)}ける^{①表6}は、まだ帝出でさせおはしまさざり^{②(19)}
ける^{①表6}さきに、手づからとりて^{②(16)}、春宮の御方にわたしたてまつりたまひて^{②(16)}
ければ^{①表6}、かへり入らせたまはむ^{②(20)}ことはあるまじく思^{おぼ}して^{②(16)}、しか申させた
まひける^{②(17)}とぞ。

『方丈記』ゆく河の流れ

ゆく河^{かは}^{②(24)}の流れは絶えず^{②(19)}して、しかももとの水に^{うか}あらず^{②(19)}。よどみに浮ぶうた
かた^{②(24)}は、かつ消え、かつ結びて^{②(16)}、久しく^{③(8)}とどまりたる^{②(17)}ためしなし。^{③(7)}
世の中にある人^{②(24)}と^{すみか}栖と、またかくのごとし。たましきの都のうちに棟^{むね}を並べ、
麓^{いらか}を争へる^{②(30)}高き^{いや}賤しき人^{③(10)}の住ひは、世々^{すま}を経て^{②(16)}尽きせぬ^{②(19)}ものなれど^{①表2}、
これをまことかと尋ぬれば^{④(1)}、昔ありし^{①表6}家は^{まれ}稀なり^{①表2}。或は去年^{あるい}焼けて^{②(16)}、
今年^{ことし}作れり^{②(30)}。或は^{おほいへ}大家ほろびて^{②(16)}小^こ家となる。^{②(25)}住む人^{②(24)}もこれに同じ。^{③(7)}所
も^{②(19)}変らず^{②(19)}、人も多かれど、いにしへ見^しる^{①表6}人は、二三十人が中にわづかにひ
とりふたりなり^{①表2}。朝^{あした}に死に夕^{ゆふべ}に^{うま}生るる^{ならひ}^{②(24)}、ただ水の泡^{あわ}に^ぞ^{⑤(7)}似たり^{②(17)}
ける^{①表6}。

4.3 適用結果について

下線を引いた部分と引かない部分とを一見して分かるように、活用する語の多くには訳法（もしくは語形変化表）をあてがうことができることが分かる。学習者が適切な訳法にたどり着きさえすれば、訳法に示された現代語を文意の把握に役立てることができる。

例として、『古今和歌集』仮名序を、極力訳法の表現を用いて（該当する訳法がない箇所は極力原文のままにして）現代語訳してみよう。破線を付したところは、訳法がない箇所では原文とは異なる語を当てた箇所である。また、（ ）内の語は、現代語訳に際して補った語である。

やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉となった。世の中にいる人（は）、できごと（が）多いものなので、心に思うことを、見るもの聞くものにつけて、言い出した（の）だ。花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞くと、生きとし生けるもの、だれ（が）歌をよまなかったか。力をも入れないで天地を動かし、目に見えない鬼神をもあわれと思わせ、男女の中をも和らげ、勇ましい武士の心をも慰める（の）は歌だ。

古文を読み慣れた者にとっては原文のままとあまり変わらないようにも感じられようが、「けり」「なり」などの語の知識もない学習者にとっては、上記のように現代語に「変換」できるだけでも、理解の大きな助けになるはずである。

一方で、課題も明確である。あまりにも当然のことではあるが、太字部分を一見して分かるように、基本古語と敬語の知識がないと、たとえ概略であっても古文を読み解くことは難しい。例えば、『枕草子』を先と同様の方針で現代語訳してみると、おおよそ次のようになる。

二月月末ごろに、風（が）ひどく吹いて、空がはなはだしく黒いのに、雪（が）すこし散ったころに、黒戸に主殿司（が）来て、「こうして伺っております」と言うので、寄ったところ、「これ（は）、公任の宰相殿の」と（し）である（の）を見ると、懐紙に、

すこし春（が）ある心地（が）する

とある（の）は、本当に今日の様子に、とてもよくあった、これ（の）上の句はどうやってつけられるだろうかと思わずらった。「誰々（がいた）のか」

と問うと、「それぞれ（の方々）」と言う。みなとでも立派な（方々の）中に、宰相（へ）の御返事を、どうして何事でもないように言い出すだろうか、（自分の）心一つで苦しいので、中宮に御覧に入れようとするけれども、帝がいらっしやって、お休みになった。主殿司は、「早く早く」と言う。

「けしき」や「はづかし」の意味を知らなければ、筆者が何に「思いわずらい」、心が「苦しい」のか想像することも難しいだろう。また、敬語の知識がなければ「心一つ」以下の状況は全く分からないはずである。

これらの点について、本稿までで行ってきたような手法で学習項目や訳法を設定する方法もちろんある。ただ、基本古語や敬語に関しては中学生・高校生向けの学習参考書が質量ともに充実している。それらを用いた方が、はるかに効率的な学習になるように思う。

5. おわりに

深澤（2013）にも述べたことだが、日本語学習者が古文や文語文を理解するための簡便な方法はもっと提案されてよい。もちろん、古文や文語文を理解できるようになりたい、あるいはその必要がある、という学習者が割合として少ないのは事実である。それが、日本語教育の領域と文語文法の領域を結びつけるような提案が活発に行われない理由の一つではあろう。

しかし、「ニーズの少なさ」を理由に教材の提案を行わないのは、果たして日本語教育や古典文学教育に資することだろうか。現に、私の目の前の留学生たちは、古典文学や古代語を扱う授業に参加しながら、「古い日本語の理解」という壁にぶち当たり、誰からも手をさしのべられないまま学習を諦めていく。興味も意欲もあるのに、である。

ここまで書き連ねてきた一連の稿の根底には、そうした留学生たちを目の当たりにしながらろくに手をさしのべてこなかった教員の一人であることへの反省と後悔とがある。

いささか恣意的に学習項目を選定した箇所もあるし、訳法等について再検討すべき点もある。提案した内容で本当に学習者の理解の助けになるかは、これから学習者の協力を得て実験しなければ何とも言いがたい。それでも、提案内容は古い日本

語を前に立ち尽くしている留学生へさしのべる手になりうるのではないかと期待している。

参考文献

- 小田勝（2015）『翻古典文法総覧』和泉書院
- グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所（2015）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2015.3、中納言バージョン 2.1.1）<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- 深澤愛（2013）「外国人留学生の文語文法・古語学習について考える（1）一文語助動詞の場合一」『文学・芸術・文化』25-1、近畿大学文芸学部、pp.128(75) - 114(89)
- 深澤愛（2014a）「外国人留学生の文語文法・古語学習について考える（2）一文語動詞の場合一」『文学・芸術・文化』25-2、近畿大学文芸学部、pp.92(143) - 77(158)
- 深澤愛（2014b）「外国人留学生の文語文法・古語学習について考える（3）一文語形容詞の場合一」『文学・芸術・文化』26-1、近畿大学文芸学部、pp.52(141) - 39(154)
- 深澤愛（2015）「外国人留学生の文語文法・古語学習について考える（4）一格助詞・接続助詞の場合一」『文学・芸術・文化』27-1、近畿大学文芸学部、pp.130(29) - 117(42)
- 山口明穂・秋本守英編（2001）『日本語文法大辞典』明治書院

注

- ¹ 国立国語研究所（2015）を参照。
- ² 検索範囲を「平安（コア）」とし、「品詞」の「大分類」で「助詞」を抽出した場合。
- ³ 「品詞」の「中分類」における、助詞の下位項目。表1に挙げる名称がそれにあたる。
- ⁴ 語形が同じであるものの、学校文法では係助詞に含めないものもコーパスでは係助詞に含めている場合がある。例えば、学校文法で終助詞とされる「や」の例は、コーパスでは係助詞に分類されている。
- ⁵ 山口秋穂・秋本守英編（2001）では、次のように述べられている。
係助詞としての「は」の働きそのものには、古代から現代に至るまで大きな変化は認められない。 （「は」「変遷」項。野村剛史執筆）
「も」は、平安時代にまず、終助詞用法を失った。また①〔終助詞用法を指す。一引用

者注]に近い②の「も一か」型の詠嘆表現も実質的に消滅したと言ってよい（和歌には用例がある）。となると、③以下の詠嘆表現もややもすれば宙に浮いた形になるわけで、早くもここで、「も」は「は」と並び称されるような合説の係助詞としての性格を強くしていく。そしてその後には顕著な用法上の変化は認められない。（「も」「変遷」項。野村剛史執筆）

- 6 真偽疑問文で「か」を文中に用いる例については、小田（2015）は次のように述べる。上代では、次例のように、助詞「か」を文中に用いた用法があったが、この形式は、中古では用いられない。
- (1) 虎か吠ゆる（万 199）
- (2) わが園の李の花か庭に降る（万 4140） (p.246)
- 7 深澤（2014b）p.50（143）に従って、「をかし」の現代語訳に「おもしろい」をあてた。
- 8 平安（コア）で、キーを〈品詞の中分類「助動詞」〉、後方共起を〈品詞の中分類「助動詞」〉として抽出される 13994 件のうち、キーの語彙素が「な」で、かつ後文脈の 1 語目が「む」であるもの。
- 9 表 3 にある「がに」は、「桜花散りかひくもれ老いらくの来むといふなる道まがふがに」（古今集 349）のように用いられる助詞である。奈良時代を中心に用いられた。山口・秋本編（2001）では、接続助詞に分類されている。
- 10 コーパスの検索範囲を「平安コア」とし、〈品詞の大分類が助動詞〉AND〈語彙素が「き」〉AND〈発音形出現形が「シ」〉で検索した結果。
- 11 なお、動詞「す」の連用形「し」の用例数は 3520 例である（コーパスの検索範囲「平安コア」、〈品詞の大分類が動詞〉AND〈語彙素読みが「スル」〉AND〈発音出現形が「シ」〉で検索）。
- 12 小田（2015）でも同様の主旨の説明がなされている。（pp.412-414）。
- 13 グループ・ジャマシイ（1998）には「だにしない」という項が立てられている。「文語的表現」という解説とともに示される言い換え表現は「…さえしない」「まったく…しない」である。なお、「思うだに恐ろしい」を挙げつつ、肯定の形とともに用いて「…だけでも…」の意味で使われることもある」とも説明している。
- 14 論題には格助詞も掲げているが、検証の結果学習項目として立てる必要はないという結論に達した。

- ¹⁵ 次の通り。深澤 (2014a) (23)→深澤 (2015) (7)。深澤 (2014a) (28)→深澤 (2015) (1)。深澤 (2014b) (20)→深澤 (2015) (8)。深澤 (2014b) (25)→深澤 (2015) (2)。